

社会福祉法人京都社会事業財団 西陣病院

リニューアルした透析センターで、質の高い透析と医療福祉に力点を置く

1934年、大報恩寺(千本釈迦堂)の境内に西陣診療所として開設され、伝統の町、京都・西陣で、地域の福祉と医療を支え続ける西陣病院。2007年7月、ワンフロアー115床に集約された透析センターでは、5つのシフトを組み、活発なチーム医療を通して370人の透析患者さんに対応するとともに、患者さん全員の透析生活をMSWがサポートしています。透析センター長の今田直樹先生とスタッフのみなさんに現場の様子をうかがいました。

フットワークの良さが、チーム意識を高めていく

看護師長 佐伯昭子さん 看護師 栗野明子さん 臨床工学検査科科长 水野良彦さん 医療社会福祉課課長 山本みどりさん

患者さんのケアでご苦労されるのは、 どんな点でしょう?



佐伯 高齢の患者さんが増えていきますから、週3回の通院が高いハードルになっていることが一番の問題ですね。そして、もうひとつ気になるのが、一人暮らしの男性の患者さんです。家族の支援が少なく、食生活や水分などのコントロールが上手くいかない方が増えています。なかなか改善しない場合にはMSWと一緒に対応を考えていくようにしています。

栗野 患者さんへの対応で苦慮するのは、不満や不安があってもだまってためこんでしまう方の場合ですね。その方の興味のある話題をさぐりながら、時には私自身の個人的な話題も持



ち出して、できるだけコミュニケーションをはかるように心がけています。そうしているうちに、患者さんの気持ちが変わることがあるんです。例えば、私が産休明けで透析センターに戻った時に、私のお産のことや、皆さんのお孫さんのお話で雰囲気がなごんだ感じになって、とても嬉しかったですね。
山本 5人のMSWが、兼任の形で370人の患者さんを担当しています。私が着任してからもう30年になりますが、当初から関わった患者さんもいらいやいますし、一緒に年をとってきたという連帯感みたいな気持ちがありますね。

現在は高齢の患者さんが増えて、相談の内容も介護に絡むものが多くなりました。介護保険に関する相談、行政機関との調整、介護タクシー、住環境の改善などに細かく対応して、一人ひとりが最後まで自分らしい生活を送ることができるよう支援していきたいと日々駆け回っています。

水野 透析の余命は数年という時代から関わり、すでに30年が経ちますが、患者さんに学び、育てていただいたという思いがありますね。患者さんと接する時には、できるだけ目線を合わせてゆっくりとお話をうかがうようにしています。こちらから先に話を出してしまうと威圧的になる場合がありますから、若いスタッフにも、「待つて聴く」ことを伝えています。

スタッフ間の連携は、 どんなふう to ?

佐伯 大勢の患者さんがいらっやいますし、患者さん一人ひとり、抱えた問題は異なります。患者さんの状態や、生活面のことについての情報を極力一元化して、共有し、何か問題があればスタッフ間でカンファレンスを行い、解決するようにしています。そのためには、日々忙しい中で、透析看護自体がルーチン化しないように互いに刺激しあい、レベルアップしていけるような状況を作っていきたいと思います。

山本 透析は、徹底的にコントロールされた管理医療ですから、患者さんは強い拘束感の中に身を置くこととなります。当然、そのことを受け入れていくことが困難な場合もあります。多忙な中、スタッフと廊下ですれ違った時など、「どうしよう?」って、お互いにつかまえて話していますね。

水野 みんな熱いですよ(笑)。スタッフ間のフットワークの良さは自慢できますね。医師からの治療の指示も、スムーズ



にスタッフ間で共有し、対応に移しますから。臨床工学技士としては、安全な透析は絶対条件ですが、検査値データの変化をいち早く医師や看護師に伝え、合併症の早期診断と治

